時論
新論
理想論

核と戦ったパラオの女性伝統首長

三田 牧（みた まき）
本館機関研究員

伝統首長として働くこと

パラオのガブリエラ・ニルマンさんが、二〇〇七年一〇月に亡くなった。彼女はコロール（現在パラオ最大の人口を擁する州）における女性第二位の伝統首長「ミライル」のタイトルを有していた。日本統治時代の一九二二年に生まれ、公学校で教育を受けた彼女は、わたしがお会いした二〇〇六年には耳が遠くなっていたが、大きい声で話す日本語は明快だった。

パラオの村々には男性の伝統首長と女性の伝統首長が（理念的には）一〇名ずつ存在する。第一位から第一〇位までのタイトルは、それぞれ特定の母系出自集団（カブリール）内で継承される。ガブリエラさんは母方の曾祖母が亡くなったとき、彼女が有していた「ミライル」のタイトルを引き継いだ。パラオでは、伝統首長に選ばれた者は人びとの福利のために働くことが期待される。「みなのために働くからこそ尊敬される」、それがパラオのリーダーである。ミライルであるガブリエラさんが、身の危険を顧みず取り組んだ活動があった。彼女は反核運動のリーダーの一人だったのである。

守ろうとした尊いもの

第二次世界大戦後、国連の信託統治領としてアメリカに統治されていたパラオは一九八一年に独自の憲法を発効させた。それは非核条項を有する画期的な憲法だった。しかし信託統治を終了させるにあたりアメリカとの交渉からうち出された政治形態は「アメリカの自由連合国」というもので、そこでは一五年にわたる経済援助とひきかえに五〇年にわたってアメリカがパラオの土地を軍事利用する権利が認められていた。土地の軍事利用にあたっては核がパラオにもち込まれる可能性が出てくる。自由連合協定が抵触する憲法の非核条項をめぐって、アメリカの思惑とパラオの政治家や有力者たちの思惑が交錯するなか、核と土地の軍事利用に真っ向から反対したのがガブリエラさんをはじめとする女性たちだった。

核兵器の危険性をガブリエラさんが知ったのは、ある国際会議でモリタキ先生という長崎の被爆者に出会ったことがきっかけだった。ガブリエラさんはこう話した。

「（モリタキ先生は）原子爆弾落ちたときね、その明かりだけ見て、目玉悪くなって、かたっぽの目玉はタマ（義眼）入ってる。でも、このわたしたちの島は小さいでしょ。住んでる方も少し、少しだけでしょ。だから（もし核兵器が入ってきたら）本当に苦しい。でも、それで、よくみんなのことを助けなきゃだめ。で、わたしたち、とくに女の方ね、（戦って）とても苦しかった」

パラオの島は小さいが、人びとはその土地に根付いた暮らしを営んできた。この土地を失って、パラオ人がパラオ人らしく暮らすことはできないだろう。まして核などという恐ろしいものをもち込んではならない。広島や長崎、そしてマーシャルのようになってはならない。そのような思いから、ガブリエラさんは運動の先頭に立った。それが「ミライルとして人びとのために働く」ことだったのである。

紆余曲折の末、パラオはアメリカと自由連合協定を結び、一九九四年に独立を果たした。今日では援助金に依存した暮らしが浸透し、土地に根ざした暮らしや社会が崩壊しつつある。大国に対峙（たいじ）し揺るがなかったミライルの死に際し、彼女が守ろうとしたものの尊さを思う。

ガブリエラさん（左）と娘のシータさん